唐西域記に據ると、波斯國に之が行はれて居つたと記し、また前に引いた如く、武后の延載元年に來朝した拂多誕も波斯の人と記され、其の他冊府元龜（卷九七一）や太平寰宇記（卷一六八）には、開元七年に吐火羅國から摩尼僧を唐に遣はしたことなども見える。從つて、回鶻に居つた摩尼僧にも、此等の國の人があつたかも知れないが、それにしても、少くとも康國の人が其の間に居つて、著しい勢力を有したものであることは、容易に認め得ることであらう。

回鶻の勢力の漠北に失はれた後には、同じトルコ族の黠戛斯（キルギス）が一時此の地方に勢を振ひ、其の後契丹女眞の支配を經て、蒙古の大勢力の出現を見る事に成つた。蒙古の言語宗教土產の類に意を留めて研究するものは、その間にソグドの根元に出づるものも少くない事に氣附いて居る。而してそれを說明するものは、皆ソグドの文化が摩尼教を通じて回鶻に及び、それが更に蒙古に及んだものであると說いて居る。摩尼教によつてソグド文化の回鶻に及んだことに就いては、固より異論のあるべき筈はない。併しながら僅少の史料と大體の情勢とによつて述べた上の考、卽ちソグド人の漠北に留りて政治上に重要な役目を働いたのは、既に突厥時代に在つたとの考が認められるならば、漠北に於るソグド文化の根元も、必しも回鶻と摩尼教とに基くものとは言ひ得ない。勿論また之を蒙古の一統時代に初めて生じたことゝも言ひ得ない。蒙古時代には種々の關係上、西方の人の支那本土はいふまでもなく、蒙古の根據地にも入り込んだものが少くなかつたやうで、ソグディアナ地方の人についても、ラシッドウッディンに據ると、[8] 北京の西、或は西北に當る或町の住民の大部はサマルカンド の人であつて、幾多の庭園をサマルカンド風に作つて居るといひ（エリアス（Ney Elias）は張家口の町に西方の風が存し、またその庭園の風が他の支那の町に於ると